

研修名 支援を必要とする子どもの保育

平成30年8月21日(火) 10:00~12:30

講演 「障がいのある子どもの発達と援助」

講師 京都文教短期大学 張 貞京 氏

1 講演要旨

1) 知的な遅れがある子どもの理解

①保育上で大切にしたいこと。

- ・安心できる大人との関係が基本
→保護者との関係が上手くいっていない場合もあるので、保育者との関わりが大切。
保育者との関わりで子どもが安心できることもある。
- ・集団生活が子どもに与えるものは何かを今一度確認
→集団生活の大切さ。大人だけとの関わりでは意味がない。
子ども同士の関わり。他児と関わる楽しさや嬉しさが感じられるように。

②知的な遅れがある子どもは発達障がいの子どもの影響されやすい姿がある。

- ・大人しい子どもやお喋りな子どももいて、個人差がある。
→お喋りな子どもは、喋るからわかっていると勘違いされがちなので、注意が必要である。就学後にわかっていると発覚されることがある。
喋るから理解しているわけではない。

③抽象的な事柄の理解・判断が苦手。

- ・「みんな集まって」の「みんな」の中に自分が入っている（ふくまれている）
と思っていない。
→言葉掛けを考える。わかりやすく。
- ・原因として考えられること。
→必要な情報に注意に向けることが難しい。
生活していく中で、その場で必要な情報に注意を向け、必要のないものは捨てるのが難しく、注意できる範囲が狭い。
- ・ワーキングメモリの容量の問題。
→刺激に注意を向ける持続時間が短く、情報を溜めておくメモリが大きくな
ないと考えられる。
続けて言い続けると、あふれてしまう。分かっていたことも忘れてしまう。
優しく丁寧に話しかけすぎるのも、子どもによっては合わない場合もあ
る。

④援助のポイント

- ・ 情報に注意を向けやすくする。
- ・ 注意が向いているか確認する。こちらを向いているか、注目しているか。
- ・ 一度にたくさんの情報ではなく、注意を向けられる情報量に。
→まずは3つ伝える。抜け落ちるのは1番目か2番目か3番目かを確認。
- ・ 意味を分かりやすく伝える。
→写真カード・マカトン法・ベビーサインなど
- ・ 分かった、通じた実感を持ち、次のコミュニケーションに意識が高まる。

2 感想

知的な遅れがある子ども、肢体不自由のある子ども、発達障がいのある子どもたちが保育園に通い、他児と関わる大切さを再確認することができた。大人とだけの関わりであれば家と変わらない。集団生活で子どもに与えるものは何かを知ることができた。他児と関わる楽しさや嬉しさが味わえるように、仲立ちとなっていきたいと感じた。

また、優しく丁寧に話しかけすぎると子どもによっては合わない子もいたり、だらだらと言いつけてしまうと、わかっていたことも抜け落ちてしまったり、「みんな」の中に自分が含まれていると思っておらず、抽象的な事柄の理解や判断が苦手であったりと、保育者の日頃の言葉掛けも考え直していかなければいけないと感じた。伝えたいことを簡潔に話すことが大切だと感じた。これからの保育に生かしていこうと思う。

(記録 兜台保育園 北村 春香)

